

研究便り No. 53

令和4年度 研究の概要

発刊にあたって	1
これまでの研究の経緯	1～2
研究大会を終えての成果と課題	2～3
次期研究に向けての取り組み	3
教科等の研究実践	4～8
共創型探究学習シャトル 共創型探究学習CAN	9～11
特別活動・学校行事	12
あとがき	12

香川大学教育学部附属坂出中学校

発刊

令和5年2月吉日

発刊にあたって



学校長 笈 潤平

早春の候、皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本校では、近年、ナラティブ・アプローチの考え方に学び、生徒が授業において変わり、それが「ものがたり」として実感されることを重視した授業づくりを研究して参りました。

そして、昨年6月の令和4年度教育研究発表会に至る2年間においては、「『わたし』が変わる『ものがたり』の学び—語り合い、探究する中で、『自己に引きつけた語り』を生み出すカリキュラムの提案—」という研究主題の下、題材に対する考えの変容がおきる「ものがたりの授業」の実現に加え、生徒自身による「自己に引きつけた語り」を目指すことによって、生徒によるその題材を学んだことの意味や価値のより深い実感を保障するための手立てを具体的に研究して参りました。そして発表会では、コロナ禍の下で最終的に研究成果冊子の発行と動画配信という形になりましたが、その成果を世に問い県内外から予想以上に多くの方々の視聴をいただくことができました。

この間の取り組みに触れて私がとくに共鳴したのは、「自己に引きつけた語り」をすることによって、人が学ぶということの意味を生徒が深く実感する体験を与え、学校を出ても生涯にわたって学び続けるような人間を育成しようという姿勢です。そして、そうした体験は学習者ごとに違うものであるという視点です。これらは、昨今言われています「個別最適な学び」の実現のための重要な柱となる視点と言えると思われます。

また、本校にとって令和4年度は、5年間にわたる文部科学省研究開発学校の指定を受けた異学年合同共創型探究学習（総合学習CAN）の研究開発の最終年度でありました。こちらも、また、昨今言われます生徒自らによる「探究」を中等教育の中でどのように保障していくかについて、一つの方向性を指し示す豊かな試みになっているかと思われまます。

本号の研究便りでは、令和4年度という一つの区切りを迎えた本校の研究の現在と今後の研究の方向性を各教科および総合学習CANのそれぞれについて報告しています。皆さまの忌憚のないご意見・ご質問をよろしくお願いいたします。

最後に、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げて、発刊のあいさつといたします。

研究主題

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

— 語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案 —

1 これまでの研究の経緯

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤と

なる力の育成を中心に授業実践及びカリキュラムの研究を進めてきた。平成26年度大会からは、ナラティブ・アプローチ¹としての「語り」の研究を継続しつつ、個々の学習者の学びの文脈に沿う学習指導法を「自己物語²」の視点から追究する「ものがたり」の授業を提案した。28年度大会では、学習者の個の文脈を意識した単元構成と問いを設定し、互いにクリティカルに聴き合い問い合う中で新たな「ものがたり」を語り直す「個が響き合う共同体³」を提案した。30年度は、「深い学びを生み出すための問いのあり方」、「聴き手を育てる教師のかかわり方」を通して構築される「主体×主体の関係⁴」が、「ものがたり」の授業における深い学び⁵を生み出すことを提案した。今年度は、令和2年度大会の研究を継承しつつ、【図1】の研究構想図に示すようにカリキュラム全体を通して「自己に引きつけた語り⁶」を生み出す実践を行っていくことで、生徒の学ぶことの意味や価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける生徒を育成することを提案した。



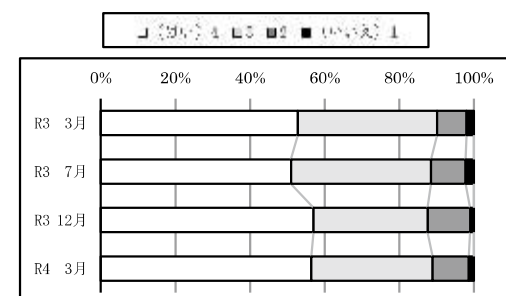
【図1 研究構想図】

2 研究大会を終えての成果と課題

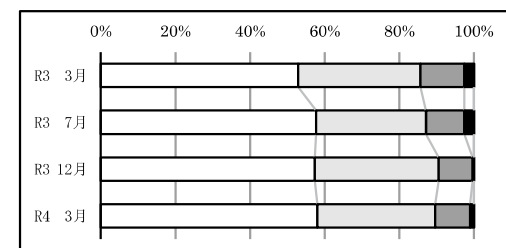
今年度の研究大会は、①単元における「授業者のねがい」の設定、②「自己に引きつけた語り」を生み出すための単元構成としかけの2点に重点を置いて実践研究を進めた。表出された具体的な生徒の「語り」や生徒アンケートをもとに、「ものがたり」の授業としての成果と課題を確認した。具体的な内容は、以下の通りである。

(1) 成果

- 学習前後の変容を意識し、より明確化することが、自己の「ものがたり」をつむぐ授業を構想するのに有効である。
- 生徒の思考の流れや文脈を授業者が想定し、それらを踏まえた単元構成や問いを設定していくことは有効である。
- 学んだことと自己とを関連づけることは、生徒の学ぶ意味や価値の実感に一定の成果があったと考える。



【図2 学んだことから意味を見出したり、価値を実感したりする】



【図3 学んだことを今までの自分やこれからの自分につなげて考える】

(2) 課題

- どのような「授業者のねがい」を設定するかについて、具体的に踏み込んだ共通認識が必要である。
- 昨期は“量”的分析として、単元終了後の振り返りからしかけの有効性を分析した。今期は“質”的分析として、1人の生徒を抽出し、毎時間の振り返りや実際の姿などを分析することで、よりしかけの有効性を見取る必要がある。
- 多くの授業において単元学習前後で、題材に対する「ものがたり」の変容は見られるものの、

¹ ナラティブ（語り、物語）という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。（野口裕二『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、2009）本校は、振り返りを語りの視点から捉え直す自己理解法ととらえている。

² 「自分自身について語る」ことを通して自己の生成と変容を理解すること。

³ 「個が響き合う」とは、生徒が主体となり互いの学びの声が活かされている状態を意味している。また「共同体」とは、個がそれぞれの学びの主体となり、積極的に仲間とかかわる中で、新たな「ものがたり」を生み出していきける、言わば「ものがたり」の深化をはかるための集団である。

⁴ 自らの意志に基づいて「人・もの・こと」にかかわろうとする学習者同士が、対等な立場で、他者を受容しながら聴き合い、語り合う関係。

⁵ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。（文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』、2017、77頁）

⁶ その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

「～を知った」「～が分かった」という知性的な結びつきのみの記述が多く見られた。それが学んだことの意味や価値の実感、さらには未来につながる自己のよりよい生き方を見いだしていくことにつながっているとは言い難い。学んだことと自己とをつなぐためのさらなる授業づくりが必要である。

3 次期研究に向けての取り組み

前回までの研究を継承しつつ、「ものがたり」の授業を通して、生徒が学んだことの意味や価値を実感できる授業を引き続き追究していく。今期は、研究大会の成果と課題を踏まえ、「生徒の自己形成につながる『自己に引きつけた語り』をどのように生み出していくか」をテーマとし、「授業者のねがいの設定」と「生徒の『情意』を働かせる『しかけ』」という視点を特に重視して以下に示す「ものがたり」の授業の定義をもとに実践に取り組んでいる。

★「ものがたり」の授業

「ものがたり」の考え方を取り入れた授業のこと。他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけることで、筋立てが変わり、学ぶことの意味や価値を実感していく。

★「自己に引きつけた語り」

「語り」の中でも、特に出来事と自己との関連を見つめ、それを筋立てて、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

(1) 「授業者のねがいの設定」について

林竹二(1987)⁷は、「学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである。(中略) 学問の場合、ものを見る見方・考え方が変わり、生き方が変わるということです。」と述べている。すなわち、学んだことによる新たな知識の獲得だけでなく、それが自分とつながり、自分自身を変えていくものにならなければ、人は学ぶことの意味や価値を実感できないと言える。そこで、授業者としてどのような「ねがい」を設定すべきか。以下の3点に着目して、授業研究を行っている。

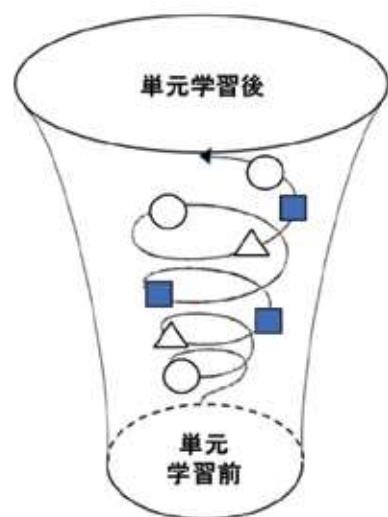
- ① 授業を通して、生徒にどのように変容して欲しいのか。
- ② その題材(教科)を学ぶ意義は何なのか。(教科の本質を踏まえた、その教科を学ぶ意義)
- ③ その題材を学ぶことが、生徒の生き方にどのようにつながっているのか。

(2) 生徒の「情意」を働かせる「しかけ」について

題材に対する筋立ての変容は、学んだことの知性的な結びつきであり、それだけでは「ものがたり」の授業でめざす感性的な結びつき⁸にはつながらない生徒も多い。では、感性的な結びつきを生み出すためにはどうすればよいのか。そこで、着目しているのが「情意」である。自分の「情意」は自分自身のものであり、それについては自分を主語にして自分の言葉でしか語れない。自分の「情意」を語るにより、その学びが自分自身とどのようにつながるのか、すなわち自分にとっての価値が自覚されやすいのではないかと考える。そこで、今期は【図4】で示すような、困難・葛藤・衝突・成功など「情意」が働く場面を「しかけ」ていくことを重視する。そして、単元における知性的な部分だけでなく、情意的な部分の変化を見つめ、それを筋立てて語ることで、その生徒ならではの「ものがたり」がつむがれていくのではないかと考える。

生涯にわたって学び続ける生徒を育成することは、簡単なことではない。ただ、「ものがたり」の授業には、その可能性を感じている。

「ものがたり」の授業の具現化に向けて、さらなる研究実践を進めていく。



- △…単元の中で自分が獲得した事実や考え
■…単元の中で他者から獲得した事実や考え
○…困難・葛藤・衝突・成功など情意が働く場面

【図4 授業構想図】

⁷ 「生きること学ぶこと」林竹二、1987、筑摩書房、p142-143

⁸ 学ぶことの「意味」とは、対象、他者、自己とのかかわりの中で、これまでの自己の学びを解体し、異なる新しい意味を見出すことであり、理解と変化による知性的な結びつきである。学ぶことの「価値」とは、結びついた新しい意味を自己に引きつけて内化することであり、感性的な結びつきであるとしている。(本校『研究紀要』2014、p5より)

《国語科》

言語による認識の力をつけ、豊かな言語文化を育む国語教室の創造

－ 方略の習得と活用を通して、学習者が学ぶ意味や価値を実感する授業の在り方 －

荳坂 恭子 木村 香織

国語科ではこれまで「知覚化－意味化－相対化」という授業方法の研究を積み上げてきた。前回研究では、「読みの指導」を中心に、〈読みを生きる体験〉と〈読みを自覚する体験〉の充実や深い読みを生み出すための学習集団づくり、題材と自己の変容に気づく振り返りの工夫等について実践し検証を行った。これらの研究は一定の効果はあったものの、作品の内容の深まりだけに終始し、学びを自己に引きつけた（国語を学ぶ意味や価値を実感した）と言えない生徒の姿も多くみられた。

そこで、今期は方略の習得とその活用に注目し、学習者が自身の読み方についてメタ認知し、方略を習得していくこと、そしてその方略を、他の言語活動や作品と結びつけていくこと（活用）で、「方略により学びが深まった」「他の作品でも活用したい」といった、学ぶ意味や価値の実感（次の学びへの意欲、期待）へとつなげたい。また、前回研究では文学的文章のみの実践だったため、今期は説明的文章における実践も進めていく。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。

- (1) 方略の習得と活用をめざす単元構成の在り方
- (2) 学びの深まりを実感する「語り合い」を生み出す言語活動の工夫
- (3) 題材と自己の変容に気づく振り返りの工夫

《社会科》

これからの社会のあり方を自ら考える民主社会の形成者の育成をめざした社会科学習のあり方

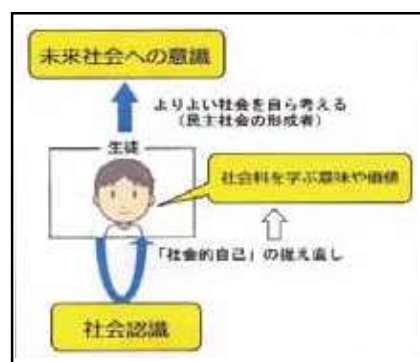
－ 「社会的価値」の対立を語り合うことを通して「今・ここ」を相対化し「社会的自己」を捉え直す －

大西 正芳 藤本 大貴

民主社会の形成者の育成という目標を社会科は掲げているが、「今、私が生きている現代とは」、「今、私が住んでいる地域とは」、「今、私が生きている社会とは」、つまり、「今・ここ」を捉えられないと、その方向性を構想することすら困難だろう。このような、「『今・ここ』の社会に生きる私」を「社会的自己」と定義し、さまざまな社会的事象の学びによって獲得される社会認識を鏡として「今・ここ」を相対化することで、「社会的自己」の捉え直しにつながると思う。

また、今期の研究では、社会的事象の背景にある「社会的価値」の対立を語り合うことを重視していきたい。その意義として、次の二点を考えている。一つ目は、「社会的価値」の対立は、時代や地域、社会を越えて普遍的に現れ、それが異なる時代、地域の特殊性と「社会的自己」とをつなげるからである。二つ目は、「社会的価値」の対立を語り合うことで生徒の持つ社会に対する価値観、言い換えれば「社会観」が表出しやすいということである。生徒にとって「社会観」の異なる他者と語り合う姿勢こそ、これからの民主社会の形成者に求められる資質・能力だと考えている。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。



【研究構想図】

- (1) 「社会的価値」の対立を設定し「社会的自己」を捉え直す単元構成
- (2) 自己の「社会観」を語り合う場の設定と工夫
- (3) 「社会的自己」の捉え直しを「ものがたり」で語り直す工夫

《数学科》

学ぶ「喜び」を実感する数学教育のあり方

－ 数学的活動から生まれる「ものがたり」を通して －

吉田 真人 逸見 翔大 渡辺 宏司

これまでの研究の中で、他者と語り合い、学び合うことで新たな疑問や気づき生まれること、また、「振り返り」や「語り直し」を通して、授業前後で題材（単元）に対する「ものがたり」の変容が見られることが、数学を学ぶ意味・価値を実感するために重要であるということがわかった。

そこで今回は、「数学を学んでよかった」というような、数学を学ぶ「喜び」という感情が生徒の中に生まれることで、数学を学ぶ意味・価値を実感するのではないかと考えた。具体的には、「数学を使って考えることが～の場面で使えた。（実用的価値の実感）」、「数学の授業を通して、～な力が身についた。（陶冶的価値の実感）」、「数学で～を考えたことがすごい。（文化的価値の実感）」のような情意である。生徒が数学的活動を通して、数学的な見方・考え方を働かせながら学び、その学びの過程をそれぞれが個人の「ものがたり」として書き換えていくことで、学ぶ喜びとともに、数学を学ぶ意味・価値の実感につながると考え、本研究主題を設定し、以下の3点を研究の柱として実践を進めていく。



【1年「作図」の活動場面】

- (1) 「螺旋型サイクル」を意識した単元構成の工夫
- (2) 「困難」を生み出す題材や発問の工夫
- (3) 学習したことを「つないで」語ることを促す「My Math Story」の活用

《理 科》

進んで自然とかかわり、見通しをもって探究できる生徒の育成

－ 科学する共同体の中でつむがれる「ものがたり」を通して －

山下 慎平 島根 雅史

本校理科における自立した学習者とは、「進んで自然とかかわり、探究する生徒」であると考えている。このような生徒を育成するため、「自然の真理や摂理の追究」と「意味や価値の実感」を大切にして研究を行ってきた。これまでの研究により、生徒の思考を踏まえた単元構成や問い、対話を促す教師の手立て、「ものがたり」をつむぐための振り返りの工夫などが有効であることがわかっている。前回大会では、自らが問いに対する仮説を立て、探究する中で、自己と自然とのかかわりを新たな視点で捉えることのできる生徒の育成をめざし、研究を進めてきた。それらは一定の効果はあったものの、仮説を検証することが困難な生徒や、学んだことの意味や価値の実感を伴っていない生徒の姿も見られた。そこで、今回は、これまでの研究を引き継ぎつつ、次の3点を研究の柱として研究を進めていく。



【硬貨の揺れを調べているようす】

- (1) 自然観の変容を生むための単元構成の工夫
- (2) 仮説を立て、検証する力を育成するための教師の手立て
- (3) 自己に引きつけた語りを生むための振り返りの工夫

《音楽科》

音や音楽に意味を見出し、音楽とのかかわりを深める学習のあり方

－ 音楽観の捉え直しや変容からつむがれる「ものがたり」を通して －

荒岡 真衣

本校音楽科は、これまで、音楽のよさや美しさを味わうことのできる学習のあり方について研究を進めてきた。その中で、音楽を形づくっている要素を支えとして思いや意図を伝え合い、音楽そのものに対するよさや美しさについて語ることに成果が得られた。

今期は、これまでの研究を継承しつつ、生涯にわたって音楽のよさや美しさを味わうことができる生徒を育成するために、生徒が音や音楽に意味を見出し、音楽とのかかわりを深めることができる学習をめざしている。音や音楽に意味を見出し、音楽とのかかわりを深める学習を行うためには、授業者が音楽を形づくっている要素の何に注目させることで、生徒が音や音楽に意味を見出すのかを考えることが大切である。その上で、単元構成や題材曲の選択を工夫し、自己の音楽観の変容を意識させたいと考え、以下の3点を柱として、研究を進めていく。



【題材について語り合う様子】

- (1) 題材曲に対する思いや感情を引き出す単元構成の工夫
- (2) 〔共通事項〕を支えとして思いや意図を語り合う場の設定と工夫
- (3) 「音楽ものがたり」を生成するための振り返りの工夫

《美術科》

自分にとっての美を広げ、深める創造活動

－ 他者や社会と関わりながらつむぐ美術のものがたり －

渡邊 洋往

美術科では創造活動の価値を、①歴史的、地理的にあらゆる場面で営まれてきた人間活動の基礎、②自らの見方で世界を捉え、答えを見出し、新たな問いを生み出すこと、③その活動自体の喜び、と考えている。また、創造活動には感覚や感性を伴った経験が不可欠であり、それらを通して創造活動の価値を見出すことが美術科の本質であると考えます。

近年はVUCAと呼ばれる時代と言われている。また、AIの進化は目覚ましく、美術作品の制作すらAIが実現できるようになり、人間にとっての創造活動の意味、価値が問い直されていると言える。一方で前回の研究より、生徒の考える“美しい”とは、一般的な“美”であり、他者の価値観をそのまま取り入れた受け売りのものが多く、自分にとっての美を見出す生徒は少ない傾向があることがわかった。

そのような時代を生きる生徒には、創造活動を通して“美”を広げ、深めることを通して、自分にとっての“美”を見出すものがたりをつむぐことが求められるのではないかと考える。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。



【グループで作品展示方法を検討する】

- (1) 題材をまたいでもものがたりを育むための3年間のカリキュラムの工夫
- (2) 社会との関わりを感じさせる題材設定・単元構成の工夫
- (3) 美術で語り合い、思考を深めるための問いの設定

《保健体育科》

健康やスポーツの価値を実感する保健体育学習のあり方

ー 感性を表出するしかけから生まれた「ものがたり」を通して ー

徳永 貴仁 廣石 真奈美

本校保健体育科では、「健康やスポーツの価値を実感する」ために、保健と体育を一体として捉え、研究を行ってきた。

今期は、保健と体育を一体として捉え、「健康やスポーツの価値を実感する」ために、生徒の内面に焦点を当て、感性が表出されるようなしかけを講じることで、その有効性について迫っていく。また、教科の本質である「健康の保持増進のための実践力を身につけ、豊かなスポーツライフを実現する」ために、心と体のそれぞれを一体として捉える必要があると考え、そのために「自分のからだに考えを巡らす（巡らし続ける）」生徒を育みたい。「健康やスポーツの価値を実感する」ための手立てとして、感性を表出するしかけから生まれた「ものがたり」の授業を構想し、その実践の中で今期は以下の3点を柱として、研究を行っていく。



【作戦に応じて活動する様子】

- (1) 学びを日常化へとつなぐ保健と体育に関連させたパフォーマンス課題の開発
- (2) 自分のからだに考えを巡らせ続けるための単元構成の工夫
- (3) 自己の感性が表出される振り返りの工夫

《技術・家庭科》

持続可能な社会を構築する実践力を育む技術・家庭科教育

ー 問題解決に向けて語り合い、実践することで生まれる「ものがたり」を通して ー

大西 昌代 加部 昌凡

本校技術・家庭科では、「持続可能な社会を構築する実践力」を「①社会の一員としての自覚をもち、消費が持つ社会的・環境的な影響力を理解する力」、「②環境問題や社会貢献等の社会的問題に関心をもち、批判的に考える力」、「③自分の生活が持続可能な社会の構築につながっていることを自覚しながら、生活をよりよくしたり、自己の生き方を考えたりする力」、と定義し、自ら実践する力を育むことをめざして研究を進めてきた。



【題材について語り合う様子】

実践力につなげるためには、生活の中から問題を見いだして自分なりの解決策を考えていくことや、物事を広い視点から捉え直し、自分との繋がりに気付くことが重要だと考える。これまでの研究では、自己に引きつけた語りも見られたが、生活経験の差から身近な問題を見つけることが難しい生徒や、課題意識が低く、授業内での実践で終わってしまう生徒の姿も見られた。そこで今期は、以下の3点を手立てとして研究を行っていく。

- (1) 生徒の当たり前を捉え、持続可能な社会を構築する実践力につながる題材構成
- (2) 生活の中から問題を見だし、語り合い、探究するための題材や共通体験
- (3) 持続可能な社会を構築する実践力へとつながる問いの設定や実践レポートの工夫

《外国語科》

英語でのコミュニケーションの先にある感動体験の創造 ー「本物」との出会いを通してー

黒田 健太 石田 吏沙

外国語科では、英語を通して様々な国の人々と意欲的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成を目指し、コミュニケーションの意欲を高める研究を進めてきた。単元の中で意図的に「困難」を設定し、生徒がそれを乗り越えようと試行錯誤し、問題解決に向かい、達成感を味わわせてきた。ある一定の成果は出たものの、こちらが設定した「困難」であったため、必要感や課題を生徒が自分事として捉えるという部分に関しては課題が残った。



【課題解決に向けたやりとりの場面】

そこで今期は、生徒自らがやり取りの中で課題を見つけ出し、試行錯誤しながら答えを探し求め、実際に試すことで、様々な感情が動き出すような環境を整える。英語を使う必然性を設定することで、コミュニケーションの意欲の向上につなげる研究を進めたい。

そのためには、生徒が「本物」との出会いを通して「感動」を味わう体験をすることが大切であると考えます。「本物」とは、英語でしかコミュニケーションをとれない人や状況のことであり、「感動」とは、「嬉しい」「悔しい」「悲しい」「驚く」など、様々な感情が動く事だと定義する。

「本物」に触れる機会を計画的に設定し、感動体験をすることで、英語でのコミュニケーションに対する新たな「ものがたり」を紡がせたいと考えている。それらを通して、様々な国の人々と意欲的にコミュニケーションを図ろうとする生徒を育成したいと考える。今期は、次の3点を柱として、研究を進める。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 英語でのコミュニケーションの必然性を感じられる単元構成の工夫(2) 「本物」に触れる場面・機会の設定（環境づくり）(3) 英語でのコミュニケーションに対する新たな「ものがたり」への振り返りの工夫 |
|---|

共創型探究学習シャトル

共創型探究学習シャトル(以下、シャトル)のねらいは、共創型探究学習CAN(以下、CAN)の探究活動における問題解決に向けた技能を習得させることにある。これまで、講座内容が生徒の実態に合っているのか、CANの探究で活用されているのかといった課題が挙がったため、シャトルの講座内容と全体の枠組みの見直しを図り、下記のように前期は選択講座8講座(探究を進めるためのスキルを獲得する)、後期は共通講座「質問力」と、選択講座8講座(探究をまとめるスキルを獲得する)を実施した。生徒は、前期、後期でそれぞれ1講座ずつ選択して受講する形をとった。

	2022 講座名	講座内容
前期 選択講座 2022年2月	①発想法	ブレインストーミング、KJ法、など、発想方法スキルの習得
	②困りを発見する力	・自分の生活の中で「困り」に着目し、課題を立てる ・身の回り(身近な人、地域)の「困り」に着目し、課題を立てる
	③電話・メールマナー	外部の方とスムーズに連携するために、電話のしかた、メールの書き方を学習する
	④アンケート	研究に必要なデータを収集するために実際にアンケート調査(質問紙作成など)を実施する→特に質問項目の立て方に重点を置く
	⑤ロジカルシンキング	ただ考えるのではなく、思考ツールを実際に使いながら、考える「方法」を身につける
	⑥仮説を立てる力	仮説を立てる力の育成
	⑦コミュニケーション力	クラスターで探究が円滑に行われるコミュニケーションスキルの習得
	⑧プロジェクトマネジメント	仕事、メンバー、方法を工夫し、時間を効率的に使う方法
2022年10月 共通講座「質問力」		発表方式での質問する力の育成
後期 選択講座 2022年10月	⑨分析・考察の仕方	実験や調査から得られたデータの間に、関係があるのかないのか、相関関係を探る技能の習得
	⑩タブレットの使い方	タブレットのデータの保存方法。タブレットにあるアプリケーションの説明、使用方法等
	⑪プレゼンテーション1	発表方式でのプレゼン力～PREP法～
	⑫プレゼンテーション2	プレゼンテーションソフトの効果的な使い方や技能の習得
	⑬視覚化	情報を分かりやすく伝えるために、絵やグラフなどで視覚化する技術の習得
	⑭グラフの見せ方1	データの処理 ～excelの使い方～
	⑮グラフの見せ方2	データをどのように見せるか。表計算ソフトの使い方(基礎編)
	⑯動画編集	GIGAスクール環境でのタブレットを使った動画編集

【図1 共創型探究学習シャトル2022講座】

○後期共通講座「質問力」について

CAN2021の事後アンケートから、CANの発表会で多くの質問を受けることが、自分たちの探究について新たな視点を見つけるなどの有用性を実感していたことから、今年度10月に、生徒全員でシャトル共通講座「質問力」を開設した。CANクラスターをもとに教室編成し、1年生から3年生まで各教室で質問する力の育成を図った。この講座後のプレ発表会や発表会本番では、以前より生徒からの質問が増えたという実感もあり、一定の効果があったと考える。



【図2 後期共通講座「質問力」の様子】

○シャトル2022の成果と今後の課題

シャトル講座後の生徒アンケートでは、「探究に活かそうか」の問いに対し、どの講座も90%以上が肯定的な回答であった。CANのためのスキルを学ぶという意味では、シャトル講座は有用であったと考える。また、1人1台タブレットが導入され、探究やまとめにタブレットを用いる生徒が多くなっていることから、基礎的なタブレットの使い方やアプリケーションソフトの使い方の講座を設けたことで、CANとのつながりを実感できたのではないかと考える。シャトル2023講座では、生徒が「自ら問いをもつ」ことで探究テーマを設定してほしいというねがいから、2022年12月に1・2年生全員を対象に共通講座「課題発見力」を実施した。今後もシャトルで身につけたスキルがCANの探究に役立つように、講座内容や講座開設時期について検討していきたい。

共創型探究学習CAN

1 CAN 2022の活動時期と概要

コロナ禍における3度目のCANであったが、今年度は3年ぶりに選抜クラスターによるステージ発表を行うことができた。今期は下図のように、共創型探究学習シャトルがよりCANの流れの中で効果的に位置づくようにし、発表会前に問うことや発信することに関する講座を設けた。課題設定期には、探究深化シートと連動した5つのステップで関わりを行ってきたが、今期は特に仮説を立てる段階の関わり方を重視した。また、CANを通して身に付けてほしい力を学年ごとに整理し、CAN前後での自己評価や生徒の姿がどう変容したかについて分析を試みた。



【令和4年度 活動時期と概要】

時期	冬休み・1・2月		3月	4・5・6月			7・8・9月			10・11月	
活動	シャトル 選択講座	1人CAN	編成1	編成2	CANの 日Ⅰ	中間 発表	CANの 日Ⅱ	探究 活動	CANの 日Ⅲ	シャトル選択 ・共通講座	まとめ 発表会
内容	探究の種を探し、個人で探究テーマを設定する。		意見を出し合って探究テーマを深化させる。	探究の方向性・方法等について専門家からアドバイスをもらったり、予備調査を行ったりする。			調べた方法で調査や実験など探究活動に取り組む。CANの日を活用し、外部の専門家から意見をもらう。			探究成果をまとめ、発表を行う。探究の成果を最終論文集にまとめる。	

(1) 仮説を引き出す関わり

過去の探究深化シートの分析により、「仮説」の精度に大きな差が見られることが分かったことから、今期は仮説に重点を置いた。右に示す下線部のように、探究深化シートを見て関わる中で、生徒の考える「当たり前」を引き出す関わりや「根拠」を問う関わりを意図的に行ってきた。このクラスターの場合は、光合成の効率に着目しているが、やりとりの中で、「光の強さ」や「光の色」などの変数が引き出された。この後の探究方法も、「光の色」を中心として探究が進んでいった。探究方法を具体的に考えていくうえで、仮説が立てられることが重要であることを共通理解できたことは大きな成果であった。

(2) CANを通した変容の分析

CANは3年間を通した1つのカリキュラムである。1～3年生ではそれぞれ見習い、弟子、師匠としての役割を果たしながら、探究活動を行っていくが、それぞれの立場に求められる力は異なる。各学年において、その資質・能力がCANによって身についたかどうかをどのように判断するかが課題であった。今期は、クラスターの一次編成を行った後に事前アンケート、発表会後に事後アンケートを行い、その変容を分析するとともに、生徒の姿や振り返り、CAN物語から生徒の変容を捉えた。

2 CAN 2022の成果と課題

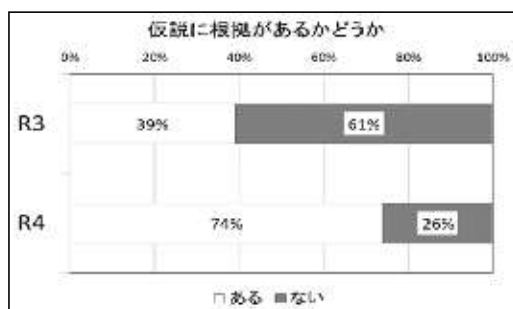
探究深化シートを分析した結果、仮説の中に根拠があるものの割合は昨年度に比較して約2倍に増加した(右図)。

T: 効率が良いつてどういうイメージ?
S2: えっと、太陽の光よりも活発に光合成を行うって感じです。
T: なるほど、太陽の光での光合成は不十分って思っているわけやね。どうして活発に行わせたいの?
S1: 地球温暖化が問題になっているからです。環境問題を解決したいと思っています。
T: すごい、提案性がある探究やね。じゃあどうやったら活発に光合成を行うと考えているの?
S1: えーと、太陽とはちがう光かなと思っています。
T: どんな光?
S1: 太陽より強い光を当てたり、色を変えたりすると、活発に行うかな。
T: なるほど、それがみんなの仮説なんやね。どんな光とか、そこに根拠はあるの?
S1: いやー、まだ調べられていません。

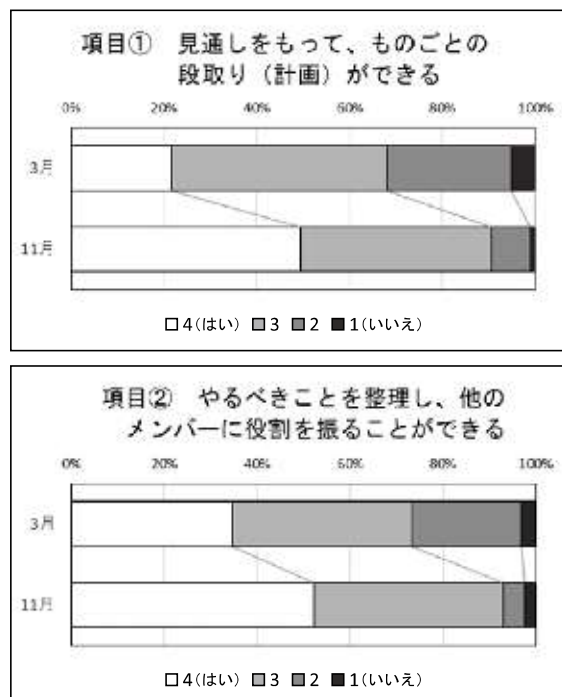
【課題設定時の逐語録(T:教師、S:生徒)】

見通しをもって、ものごとの段取り(計画)ができる(師匠)
やるべきことを整理し、他のメンバーに役割を振ることができる(師匠)
クラスターメンバー全員が活動や話し合いに参加できるよう、コミュニケーションをとることができる(師匠・弟子)
自分の意見をまとめ、相手に伝えることができる(弟子)
与えられた役割を責任をもって果たすことができる(見習い)
役割を見つけ、自分なりの考えをもって活動できている(見習い)

【事前・事後アンケートの一部】



右図は、3年生（師匠）として求められる資質・能力が身についているかどうかについて、CANが始まった3月（当時2年生）とCANが終わった11月に、3年生が自己評価した結果である。この1年間、クラスターリーダーとしての経験を通して、力が付いたことを実感している生徒の割合が増えていることが分かる。このように、CANの前段階で一度自己評価をさせることは、自分の学年が発揮すべき資質・能力を見習い、弟子、師匠それぞれの姿として意識させることにもつながったと考える。しかし、リーダーとして力を発揮していた3年生の中には、3月から11月にかけて、自己評価が下がっている生徒もいる。しかし、生徒の書いた「CAN物語」からは、クラスターリーダーとして、上手くリーダーシップがとれない場面はあったにしても、クラスターリーダーだからこそ学べたことや、クラスターメンバーと充実した探究活動ができたことなど、数字には表れない成長、価値付けが語られている。



3 CAN 2023に向けて

今回は体育館での最終発表ができ、発表に向けての準備をシャトルと連携しながら進めることができたが、問うことや発信することについては、まだ課題の残るところ

【ある生徒のCAN物語】

3年間のCANを振り返ってみると、本当にいろいろなことがあったと思う。そんな中、私が思うCANとは「成長」なのだと思う。1年生のころは2、3年生についていっただけ。2年生では少し意見を言えるようになった。3年生ではクラスターをひっぱりすることができた。CANでは、1～3年生までの異学年が何の隔たりもなく交流し、活動できる。そんな環境だからこそ、得られるものは多い。

である。発表会の持ち方も含め、相手に伝えることだけではなく、問い合いながら、お互いの探究を深めていけるような学習をめざしたい。そのことは、教科の学習にも自ずとつながってくると考える。

語り合いの時間

「語り合いの時間」とは、答えのない問いについて参加者全員でじっくり考え、語り、聞き合う時間である。ともに語り合い、探究する集団の土台づくりを目的とし、令和元年度より取り組みを続けている。本年度の取り組みの概要は、以下の通りである。

【ねらい】あらゆる出来事や問題を自分ごととして捉え、自ら考え、語れる生徒の育成

※本来、「あらゆる出来事や問題」には教科で学んだことや社会的に解決が必要な事項などがあるが、ここでは「身近な問題」についての意味

- ・人数：各クラス35名を4グループ（9名・9名・9名・8名）に分ける。
- ・テーマ：①二項対立型（「嘘をつくのは悪いこと？」「時間とお金、どちらが大事？」など）
②拡散型（「何のために勉強するの？」「幸せって何？」など）
- ・ルール：コミュニティボールを持った人が話す、人が話している間は聞く、発言権を持ったまま黙った人がいたら待つ、途中で意見を変えてもよい、など
- ・振り返り：10分の記入時間を確保する。



アンケートより、生徒は「答えがないので自由に話し合えること」「普段考えないことについて深く考えられること」「価値観の違いを感じられること」などに、語り合いの時間の価値を感じている。

特別活動・学校行事

プロジェクトを中心とした生徒主体の学校行事の運営

本校では、学園運動会、送別芸能祭をはじめとするさまざまな学校行事が実施されている。その行事の多くは、生徒の立候補によって組織されたプロジェクトのメンバーによって企画・運営されている。各プロジェクトの生徒たちは、それぞれの学校行事を思い出に残る素晴らしいものにするために、自分たちで課題を見つけ、語り合い、改善していく。教師は、そのような生徒たちをサポートする立場に徹し、助言することはあっても、最終的には自分たちで考え決定させていく。

今年度は3年ぶりに1日開催の運動会を開催することができた。ただし学園での運動会は開催できなかったため、中学校単独開催となった。しかし、生徒会役員が中心となって生徒会種目を2種目企画するなど、生徒主体の運営ができており、収穫は大きかったといえる。

また、今年度は3月に送別芸能祭を予定している。学校行事が本来の形に戻りつつあるなかで、教員も生徒の主体性を尊重した関わりを行っていきたい。



【生徒会種目のようす】



【学年団でダンスを教えるプロジェクト】

あ と が き

副校長 川田 英之

本年度は、教育研究発表会を6月10日に開催する予定にしておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を踏まえ、本校での授業公開による発表から、オンライン（オンデマンド）による発表に替えさせていただきました。対面での発表が叶わず残念ではありましたが、例年の研究発表会の参加数を大きく上回る、1600を超えるアクセスをいただきました。また、県内外の教育機関等に約1400冊の研究紀要を送付させていただき、本校研究の成果を広くお示しすることができました。

文部科学省研究開発学校の指定を受けている共創型探究学習CANについては、本年度研究指定の最終年度として、4年間の探究活動を通して見てきた子どもたちの変容を分析し、1月18日の文部科学省研究開発学校フォーラムにて発表を行いました。また、研究開発の功績に対し、教員一同が、令和4年度文部科学大臣優秀教職員表彰を受けました。研究の具体的な成果や課題については、今後、公開、発表を行う予定です。

本校研究も令和6年度の教育研究発表会にむけて、授業における生徒の情動面に焦点を当て、新たなスタートを切ったところです。

資質・能力（言い換えると、応用が可能な汎用的な力）の育成を意識した授業が広く行われるようになってきました。しかし、応用が可能な能力と応用しようとする意欲は別物です。生徒が自ら学びの行為の主体となって初めて、学びはその生徒にとって意味をなし、資質・能力も育成されます。教師の役割は、それぞれの生徒がどんな所に興味をもっており、どこが分かっているのか、何を求め、何を表現しようとしているのかといった学び手の思いをとらえ、その実現を図る場を用意することでしょう。困難、葛藤、衝突、成功、驚きといった情動面と知性面とが結びついた、学び手の価値生成の行為を創出させる、密度の濃い自己物語をつむぐ授業を具体的な姿として提案できたらと思っています。

今後も、めざす授業づくりにむけて、地道な実践努力を重ねて参ります。引き続き、皆様方からのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。